

## 開催REPORT

# H.C.R.2023 国際シンポジウム

国際シンポジウムでは、オランダ、デンマーク、米国、そして日本の福祉機器市場の最新動向や各国の福祉が目指す方向性なども示され、世界の福祉分野の潮流を知る貴重な機会となりました。



## 第1部 基調講演

### オランダにおける福祉市場の発展とトレンド

オランダ大使館経済・気候 公使参事官であるピーター・テルプストラ氏は、オランダにおける福祉市場の発展と最新動向を紹介し、「寿命を延ばすだけでなく、誰もが尊厳を持って老後の人生を送れるようにするためには、テクノロジーではなく、人間をソリューションの中心に据える必要がある」と訴えました。現在開発中の最新機器では、外出先でも人工透析が可能な携帯型透析装置などを紹介しながら、「オランダの福祉は人びとを中心としたケア、予防、そして社会参画の確保を目指す方向に進んでいる」と述べ、基調講演を締めくくりました。



ピーター・テルプストラ氏  
オランダ大使館  
経済・気候 公使参事官

## 第2部 エリアレポート

### デンマーク



「デンマークの介護補助器具と最新技術」  
マッツ・ビアリング・ラ・クール氏  
デンマーク政府保健局高齢者・認知症担当ディレクター



「デンマークの福祉・介護機器市場のトレンド」  
モルテン・ラスムセン氏  
Danish Care CEO

デンマーク政府保健局高齢者・認知症担当ディレクターであるマッツ・ビアリング・ラ・クール氏は、同国の高齢者政策の柱として、①高齢者の主体性を促すこと、②自立生活とウェルビーイングを確かなものにする、③可能な限り自宅で暮らせること、④リハビリやケアにおいて人を中心としたアプローチをすること、の4点をあげました。

同国の福祉技術の最新動向では、薬の服用や食事の準備などに関して在宅介護スタッフの助言がオンラインで受けられる『オンライン訪問』を紹介し、「実際に6割の市町村が導入しており、高齢者の満足度は94%に上っている」とその成果を強調。「デンマークではデジタル化と支援技術の融合が加速しており、こうした動きによって高齢者ケアそしてヘルスケアは今後10年間で大きな変革を起こすだろう」と今後の展望を語りました。

続いて、Danish CareのCEOであるモルテン・ラスムセン氏より、福祉機器市場のトレンドとして、①労働環境の改善・介護者の保護、②介護者の負担軽減、③IoTおよびAIによる時間と資源の節約、④エンパワメントと自己決定、⑤感覚統合と刺激、の5項目をあげ、各トレンドに関連する最新機器が紹介されました。

### 米国



「米国の福祉機器市場のトレンド」  
ヨルグ・バース氏  
北米地区担当  
H.C.R.海外コーディネーター

H.C.R.海外コーディネーターであるヨルグ・バース氏は、米国の福祉機器市場のトレンドとして、最先端のテクノロジーを使ったスタンディング機能を搭載した車いす、訓練用三輪車、立位保持装置などを紹介。

米国では、国民皆保険制度の未整備、リハビリ機器など支援技術開発に対する財政支出の不足などの問題があると指摘したうえで、「ただし、政府や保険政策の変化は始まっている。障害のある方々に対する認識と受け入れに関しても新たな動きが起こっている。私たちは障害のある方々をより一層社会の貴重な一員として受け入れる必要がある。今日ここに集まっている私たち全員が、すべての社会のすべての人の生活を改善する使命を持っている。一緒に取り組むことで必ず大きな変化をもたらすことができる」とのメッセージを送り、レポートを締めくくりました。

### 日本



「日本の福祉開発メーカーこれまでとこれから」  
松永 紀之氏  
株式会社松永製作所 代表取締役社長



「福祉機器・義肢装具とユーザーの現状と可能性」  
田澤 英二氏  
保健福祉広報協会 理事

日本からは、松永製作所代表取締役社長の松永紀之氏が登壇。高齢者向け車いすの開発・製造の歴史に触れ、「改めてご利用者の“座る”ということに着目し、より快適にしたいと考えたのが2013年頃から現在に続く流れ」と紹介。便利で扱いやすいだけでなく、日々の生活をより快適に過ごしていただくための工夫を盛り込んだ車いすを提案してきたと振り返り、「ご利用者も介護者もどちらにとっても快適な車いすを生み出していきたい」と今後の展望を語りました。

最後に、本シンポジウムの進行役を務めた保健福祉広報協会理事・田澤英二氏は、H.C.R.2023のメインテーマ「クリエイティブな未来を拓く」を“体現する人”として先天性の四肢疾患により9歳で両足を切断しながら、現在アーティストとして活躍する片山真理氏を紹介。イタリアの靴メーカーとの『ハイヒールプロジェクト』を通じ、「自分がファッション性の高いハイヒールを履くことにより、これまで夢としか思わなかったことでも実現できるということを感じてほしい、それが片山さんの目標」と田澤氏は語りました。

また、事故や病気で足を切断した子どもたちに走る楽しさを体感してもらう『ギソクの図書館（ランニングスタジアム）』の紹介や、東南アジアの人びとへの義肢装具関連事業の実績（33年間で50万名以上の方に義手義足を提供など）に触れ、報告を締めくくりました。